

齋藤新治

『イギリス教育社会史』(学文社)について語る

これは下記の著作を訳出したものである。

John Lawson and Harold Silver, *A Social History of Education in England*, 1973, Methuen, London. (502 pages)

各章の末尾に付された引用文献と追加資料は訳出されず、原典（英語、英文）のままにしてある理由は教育史研究者のさらなる探求に役立つことを願っているからである。巻末（563－567頁）の精選参考文献一覧も同じ趣旨で原文のままにしてある。これは三部構成になっており第一部は経済、社会史一般の先行研究のうち教育に外から及ぼす要因を理解するに適した文献が選ばれている。第二部は教育史一般、時代別の必読文献が、第三部は19世紀と20世紀の教育史が選ばれていて、本数が最も多い。第7世紀、ローマ帝国の支配を受けながらアングロサクソン人みずからの手による教育的発達から筆をおこし、最後は20世紀60年代のプラウデン報告の評価をもって擱筆されている。

このような長期に亘る流れを書いた教育史は、ことイギリス教育史にはなかったのではないか。というか、書く必要はなかったと思う。80年代から21世紀10年代、矢つぎばやに打ちだされる教育の新機軸は即、世界に拡がっていった。「日英教育フォーラム」学会誌の論文が直ちにその実践を理論的にフォローしていた。それで充分の存在価値は認められていた。しかし改革のスローガンがつぎつぎと立ちあげられ、消えていく混沌たる渦巻きの中にある今こそ過去からの歴史の流れに立って現在と未来を見すえることが大切であると思う。限りなく波立つ大海を航海するものには海図ランドマークが必要である。文献リストがあえて訳出されていないところに本訳書の特色がある。

なにかこう書くと通史は専門に入るための基礎教養書のようにとられるかもしれないが、本書の価値はディダクチカルなものではない。歴史の流れ、それがどのような流れで、いつこへ向かっていくは、各人が自分でぶつかって評価していただくしかない。そのように歴史記述がなされているのである。著書は一貫して思惟を語らない。例えば、デュルクムの『フランス教育史』になじんだものには思惟の切れ味がみいだせないからといって本書を通史的に読んでしまうかもしれない。『イギリス教育社会史』は延長している事実そのものしか語らない。

本書の最大の特色のひとつは、文字通り精選された54枚もの挿絵の掲載である。その一枚一枚が公的文書館に記録保存されているものであり、歴史記述の要所にピンポイントでのせられている。記録文書（そのまま読めるように）、図版、教授マニュアル、師範学校カリキュラム表、そして、今世紀へ入ってからは歴史的瞬間の写真、それらのすべてが学文社の技術力もあって原典にみおとりしない、いや原典以上に鮮明に映し出されている。管見の限りであるが、こうした物や事実が語る類書がかってあったであろうか。ひとつ60年代の「ロンドン学童」（写真11-6）8人、冷たい煉瓦の校舎の壁にもたれている。理由のわからないままの子どもうつろな眼がなにかを語っている。EPA（教育優先地区）の意味を社会学のデータよりも直観的に私を分かせてくれる。デジタルカメラになれた世代に見逃してもらいたくない。それから表紙を開いてワイドに広がる「北ロンドン北方地区、浮浪児学校」ジョージ・クルックシヤク画の子どもたちの学習ぶり、学校教師の真剣さが私に語りかけてくる。胸がしめつけられるような写真が多いのであるが、著者の精選の眼はその奥にある子どもたちの、元気よく生きようとする衝動、まちがった外圧を加えられれば、それだけ強く生きようとする子どもに教育の可能性のあること、それを信じて自分をぶつけていくことに教育の本質があると著者は訴えているようだ。少し惜しいと思うのは、カバーデザインを復元できなかったことである。有名なロン・マッコニックのカラー写真。グローバル化時代、多国籍の児童たちが、授業開始をまって日当たりの悪い煉瓦づくりの校舎の階段、その狭いスペースにひしめいている色とりどりの姿の表紙装丁は本書にない。

そうはいっても歴史記述は文字によるものであり、全体の監修は小林虎五郎教授が行ない、私は第2章の中世イングランドの教育を主に分担したにすぎない。ロースンとシルバー両教授の原文をよく伝えているかどうか、北斗研究サークルの努力は努力として、読者のみなさんの厳しいご批評に耐えるしかない。

発行と同時に本書にご注目いただいた編集委員の先生には感謝のことばもない。